

子どもの交流 自転車の初乗りは小六か中学生になってから。それも家族の自転車で自分の自転車など無かった。また、現在の銀座通りは桑畑で、街灯も何もなく真っ暗そんな状況だったので、熊川の子どもは福生に行かない。福生の子どもは熊川に行かない。子ども同士の交流は殆ど無かった。

〇くらしの様子

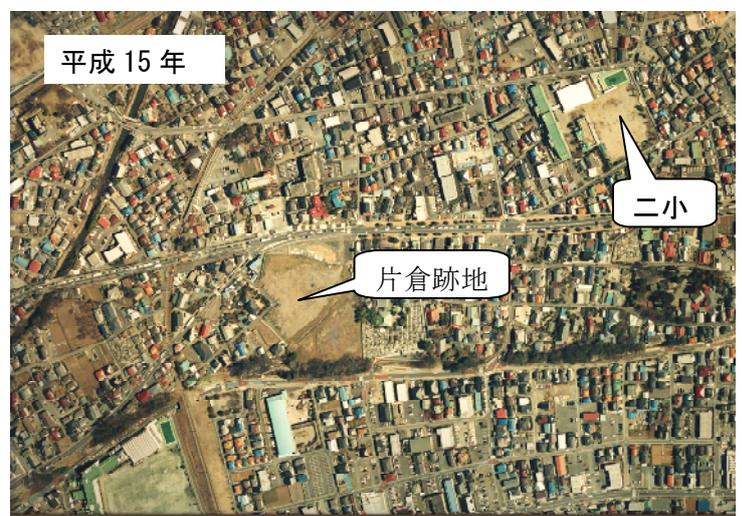
昭盛館(しょうせいかん) 白梅会館の横(現在の佐渡鉄工所)にあった娯楽の殿堂。文化的な催し(映画、演劇、落語などが上演されたほか、童謡歌手の川田正子さんが来たことも記憶している。戦後間もなく閉館となったが、心に残っている人が多い。

燃料は焚き木 現在の中央図書館の上の雑木林や玉川上水の雑木を切って家庭の燃料にしていた。松の葉は良く燃えるので拾いに行った。落ち葉もよく拾った。山にも取りに行った。そういう仕事が自分たちの仕事だった。

桑から野菜へ 森田製糸工場があった関係で桑畑が多かったが、戦後は食糧難のため野菜を植え始めた。サツマイモ、麦が多かった。はげ下(田園地域は一面の水田。その中の一角(お寺坂を下りたところ)に片倉の社宅が二軒あり、研究所のようにピーカーやフラスコがあったのを覚えている。

買い物はどこでしたの? 魚は魚道(うおみち)、米は児島米店、西村酒店、八百屋は八百光、千歳屋という呉服屋、肉卸の森田精肉店などがあり、多くは旧奥多摩街道に面していた。味噌はそれぞれの家庭で作っていた。特に醤油は、地域の人が小麦を持ち寄って一年分の醤油を共同で作っていた。その場所は「醤油蔵」と呼ばれていた。現在の片倉跡地の近く。福生方面は、マーケットがあるほど開けていた。

飢え 終戦後はとにかく食料が無かった。農家であっても小さい農家は食べられない状況だった。サラリーマン世帯は、和服を売ったり物々交換したりして食料を手に入っていたところもある。肉を買うことなどほとんど無かった。鶏や兎を飼っていて、持っていくと食べられるようにしてくれる店があった。玉子は貴重品で、病気のときや妊婦などが食べる特別な食品だった。おなかに回虫がいる子が多くて、青白い顔をしていた。おやつといえば、サツマイモと落花生。とにかく「がまん、がまん」の生活。こつこつをもらった記憶も無い。食料の無い一時期は、校庭にサツマイモを植えていたこともある。その他口に入るものはすべて食料だった。カボチャのツルでは、おなかをこわした。



〇戦争はどうだった?

小学校のとき、校舎の壁を黒く塗り替えてたり窓に紙を貼ったり空襲に備えていたのが印象的。片倉(戦中は飛行機の胴体工場)を目標にして米軍飛行機から焼夷弾が落とされた。下の田んぼに落ちたもので何人か死傷者が出た。

爆弾は、五日市線の鉄橋を破壊する目的で、拜島方面からデニスがあったところの反対側辺りまで落とされて、畑に十メートル位の穴があいたのを覚えている。

〇村から町へ 町から市へ

昭和十五年十一月、それまでは五日市街



道を境にして分かれていた福生村と熊川村が一緒になって福生町が誕生した。さらに昭和四十五年七月、福生市になる。また、旧陸軍立川航空支廠の熊川倉庫・航空審査部があった関係で、昭和十九年七月 牛浜駅が開設されるなど変化が続いた。

〇皆さんの話を聞き終えて

・筆者は、昭和二十五年の生まれであるが、中学校入学当時、クラス五十人で十々十クラスあった。十四年間でちょうど二倍に増えた。団塊の世代と呼ばれるわけである。

・明るく賑やかに話をしていたのだが、自身は戦争を挟んで激動の時代の深刻なこぼかり。つらさやみじめさが感じられないのはなぜだろうか?

・五日市線の鉄橋の土手の土は、多摩スイミングの近辺の土を運んだのだそうだ。あの辺り一帯が窪地になっているのにはそういうわけがあったのだ。



貴重なお話をありがとうございました。地域を見る目がまた少し変わるような気がします。